

大都市における子育て期の親子の 安全・安心まちづくりの指標に関する研究(I)

槇村久子

要旨

少子高齢人口減少は大都市にも見られるようになり、一方都心に高層マンション等住宅供給が増加し子育て世帯層が増加している。大都市において子育て期にある親と子が安全に安心して生活できるための条件を日常生活の視点から明らかにする。本稿では大阪市で幼児と子育て世帯層が増加している地区を取り上げ、そこに備わっている条件を現地調査、親子のベビーカーでの調査、地域の子育て支援グループ、認可外保育所、親へのヒアリング調査などで分析した。まち歩きではハード面で主に道路、公園、駅舎、商業施設や公共施設などをチェックし、その他の調査から子育て期の親子、特に女性が安全で安心して住むことができる要素を立地、交通アクセス、マンションの価格、保育施設と保育サービス、子育てサービスや施設、近くで利用できるサービスを詳細に抽出した。

キーワード：安全・安心、子育て期、まちづくり、親子、大都市

はじめに

少子高齢人口減少社会、社会経済構造の変化に伴い、女性の職場進出が進んでいる。また少子高齢人口減少化は大都市にも見られるようになり、都市のあり方を再構築する必要に迫られている。一方、地価の低下や産業構造の変化により都心に高層マンション等住居の供給が増加し、人口の都心回帰の現象も見られる。大都市における住宅供給により高齢者世帯と一方若年子育て層の世帯も増加している。このような大きな社会変化の中で、大都市において子育て期にある親と子どもが安全で安心して生活できるために、どのような条件が必要となるかを親子の現実の日常生活の視点から明らかにする必要がある。それにより、産業優先的であった都市が多様な世帯が住む都市、それにより活性化する魅力ある都市へ変わる可能性がある。そのため、本稿では大阪市の中で乳幼児や子育て世帯の年齢層が増加している地区を取り上げて分析し、大都市における子育て期の親子の安全・安心まちづくりにどのような条件が備わっている必要があるのか、指標づくりのための調査研究とする。

I-1. 調査研究の目的と方法

子どもの増加、子育て層の都心回帰、核家族の進展、共働きの増加

大都市において子育て期にある親と子どもが安全で安心して住むことができ、かつ核家族で親自身が共働きの増加の中で、男女とも仕事と家庭を両立でき、子どもを育てることが楽しいと感じられるまちのあり方を親子の日常生活の視点から把握し、分析する。それにより親子の安全・安心のまちづくりの指標を考察する。

調査研究の対象地は、大阪市とする。大阪市は人口267万人（2010年）、24区ある。『第6回大阪市人口移動要因調査報告書』（2008年度）によれば、0歳から4歳の子どもがいる世帯は大阪市から転出傾向にあるが、市内中心部においてはこれらの世帯の人口増加が著しい。

そこで、市内中心部のどの区において乳幼児と子育て世帯層の増加が顕著であるかを各種統計から分析し、各区においてまちの現地調査、親子へ聞き取り調査、親子による踏査、また保育サービス関連施設は公的施設や民間事業者、NPO等に訪問しヒアリング調査をした。

I-2. 乳幼児のいる子育て層の人口推移

子育て層の親子の安全・安心のまちづくりを考察するため、大阪市内で子どもの人口、特に乳幼児、小学校低学年までと、その親である25歳から39歳の年齢層の人口が増加している地区を選定する。また、共働き世帯の増加の動態と、共働き世帯が住居の取得できる住宅がどのように増加しているのかを住宅着工数の推移とその立地をみた。

(1) 子どもの増加

大阪市の人口推移を2006年（平成18年）と2009年（平成21年）を比較する。

「0～4歳」と「5～9歳」の子どもが増加しているのは北区、福島区、中央区、西区、天王寺区、城東区、鶴見区である。「0～4歳」の乳幼児の増加率は中央区が最も多く、133.7%、次いで西区118.8%、天王寺区113.0%である。「5～9歳」では天王寺区が最も多く105.9%、次いで福島区105.3%、西区104.7%。

表1 子どもの増加している区

区	0～4歳	5～9歳
北 区	104.6%	101.9%
福島区	112.2%	105.3%
中央区	133.7%	100.5%
西 区	118.8%	104.7%
天王寺区	113.0%	105.9%
城東区	106.0%	100.4%
鶴見区	103.4%	100.4%

表2 子育て世帯層の増加している区

区	25～29歳	30～34歳	35～39歳
北 区	107.1%	101.5%	110.8%
福島区	106.1%	101.5%	119.4%
中央区	113.3%	110.5%	117.6%
西 区	121.7%	104.8%	118.4%
天王寺区	104.8%	104.9%	109.1%

(5) 待機児童数の推移

待機児童は2010年4月現在では、ゼロのエリア（エリアは24区をさらに分けたもの）が35のうち16エリアと約半数が解消されている。しかし前年からの増減を見ると待機児童が増加しているエリアは7箇所ある。大阪市では入所枠の拡大や、新規の認可保育所の設置を進めることで、2005年4月には3万9903人を受け入れており、政令指定都市のなかで第一位であった。

Ⅱ 子育て層が暮らすまちの実態 西区堀江地区の現地調査

子育て層が多い大阪市西区の堀江地区を現地調査し、子育て層がなぜ多く住んでいると考えられるのか、また子育て層のニーズや課題を探るため、下記の調査を実施した。

西区は中央区の西に隣接する。西区は地下鉄、JRの交通アクセスや通勤の利便性が高く、ターミナルにも近い。人口は増加傾向にあり、まだ高層マンションの建設が進んでいる等の特徴がある。特に堀江地区（北堀江と南堀江）は子育て層の居住地域として便利であると事前ヒアリングによる観測から、どのように子育て層に適した地区であるかをまず現地調査によって検証する。

Ⅱ-1. 西区堀江地区の現地調査

予測される子育てに必要な施設がある、日常生活に必要な施設がある、子育て期においても親が楽しめる施設がある、通勤に便利である、安全が感じられるという視点から、調査項目を選定した。

現地の調査項目は、①立地 ②交通手段（鉄道） ③町並みの様子 ④保育施設 ⑤公園
⑥医院・病院 ⑦日用品の販売店 ⑧飲食店 ⑨近くにある公共施設 ⑩その他

現地調査の結果

①ターミナルの難波や南の繁華街の中心に近い、また北のターミナルの梅田、大阪駅にもアクセスが良い

②交通アクセス

地下鉄四つ橋線、長堀鶴見緑地線、千日前線に囲まれ、西長堀駅、西大橋駅、四つ橋駅、桜川駅がある。四つ橋線の東側には御堂筋線があり、四つ橋駅もある。道頓堀川を挟んで桜川駅、なんば駅、木津川を挟んでドーム前千代崎駅もある。特になんば駅ターミナルに近い。交通利便性が高く、通勤時間が短縮される。

③町並みの様子

北堀江、南堀江地区ともにマンションが多く立ち並んでいる。繁華街の心斎橋に近い北堀江は多くの洋服や雑貨、カフェなどのショップが多く若者の人通りが見られる。新なにわ筋を挟んで南堀江に近づくほど静かな住宅街の様相になる。

④保育施設

保育サービスの中で、認可保育所は南堀江に1ヶ所ある。西区は若年層の流入が多く、待機児童が解消されていない。また多くのオフィスや繁華街の店舗も多く、補完のためか四ツ橋駅と西長堀駅近くに認可外保育施設が5箇所ある。

⑤公園

公園は各所に5箇所ある。親子連れが多く、父親と子どもが遊ぶ姿も見られ、都市部のオープンスペースとしてよく利用されている。トイレのある公園もあり、親子連れには便利である。土佐公園に隣接して土佐稻荷神社の境内地もある。

⑥医院・病院

小児科のある大阪市夜間休日救急診療所が地下鉄長堀駅すぐにある。また南堀江に救急病院が1ヶ所、その他にもあり、子育て期の親には子どもの急な病気にも安心できる。

⑦生活用品の販売店

北堀江、南堀江にスーパーマーケットが各1店舗あり、毎日の生活用品の購入には支障がない。コンビニエンス・ストアも数多く、心齋橋まで徒歩20分であり、生活用品の購入にも不便がない。

⑧飲食店

北堀江は、近年“若者の町”と呼ばれ、ファッションの店の他、カフェやレストランが多く見られる。ベビーカーを置いて親子でランチをとる姿も見られ、気軽に子連れで入れる店もある。

⑨近くにある公共施設

大阪市立中央図書館、大阪市立子ども文化センター、西区役所

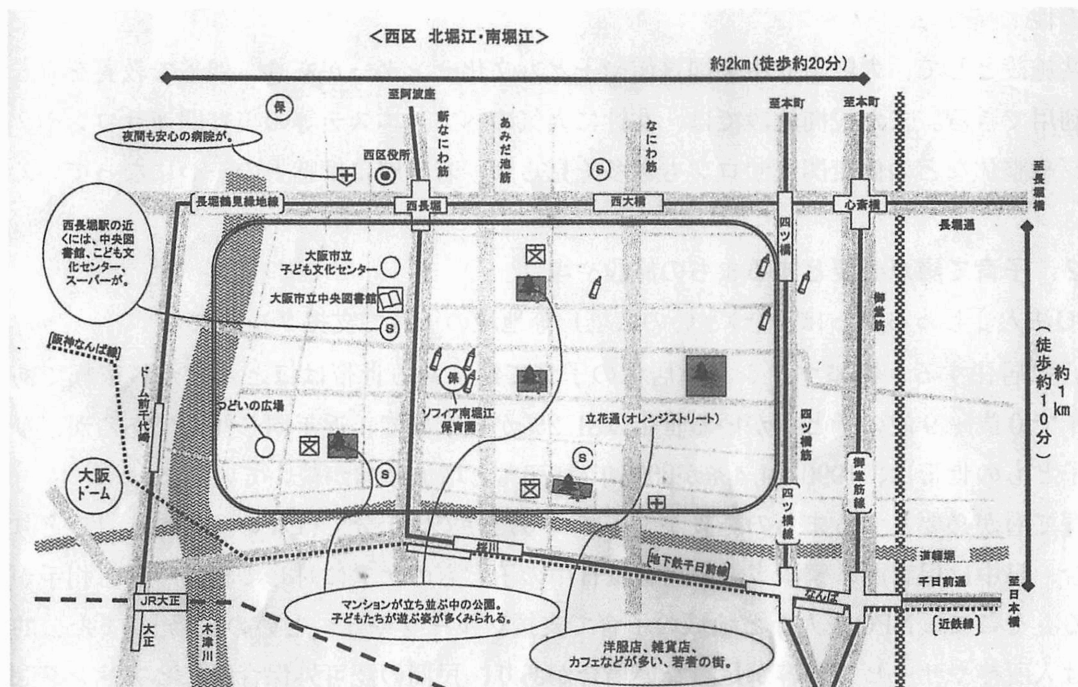


図3 西区堀江地図の調査結果図



写真1 西区堀江地区のまち

⑩その他

公共施設として、大阪市立中央図書館や子ども文化センターがあり、親子で教養を育む場として利用できる。また民間施設では、女性に人気のヘア・エステ等の美容関連サロンや、マッサージや整体などの健康関連サロンも数多く見られ、若年層には魅力の一つになっている。

II-2. 子育て層が必要とするまちの施設や場

NPO法人「しゅっぱぽ」(つどいの広場) 等地域の子育て支援グループ

都心に居住する、特にマンション居住の子育て期にある世帯はほとんどが核家族である。2005年で0歳～9歳の子どもがいる世帯は81.2%が核家族で、近年同じ傾向であるが、ひとり親と子どもの世帯は、1990年4.4%が2005年は9.6%と増加傾向が続いている。

子育て層が必要とするまちの施設が整っているだけでは十分ではない。共働き(ひとり親)の場合、日中は保育所、家事専門の場合は日中の子どものケアに対して相談や話し相手が必要になる。そこで、NPO法人など地域の子育て支援グループや「つどいの広場」、また公的保育所では入所枠やサービス内容が足りない場合があり、民間の認可外保育所にヒアリングした。

1. 家庭での保育を補完する地域の子育て支援グループ

西区にある子育て支援グループのNPO法人〈A〉
NPO法人〈A〉は、自分の家の1階部分を改装し、地域の乳幼児を持つ親とその子ども（0歳～就学前まで）が利用できる。20年前に始められ現在はNPO法人になり、大阪市の「つどいの広場事業」（地域子育て支援拠点事業）に位置づけられている。

開館時間は、月水木金の平日と日曜日の10時から15時で、休館日は火、金曜日と祝日。



写真2 子育て支援グループのNPO

利用人数は、多い時で1日40組になることもある。運営体制は、15人のスタッフで回し、常時2人程度で、スタッフの中には子育て中の人や以前同所の利用者もいる。スタッフは地域の人が多く、地域の情報にも詳しい。

利用者は、平日は家事専業の母親が子連れで来る。日曜日は自営業で店を経営する女性や、平日は通勤している女性が子どもと二人きりでどう遊ばよいかわからなくて来訪するケースもある。

来訪者の女性の特徴は、次のようである。子どもの集いの広場であるが、実際は子どものためというより、母親のためで、ここに来ればスタッフや他の母親と情報交換することで自分がリラックスできるという。子連れで行ける美容院や飲食店などを持ち寄って情報ファイルも作成。壁に情報を展示している。「今のお母さんたちは、子育てのためだけではなく、自分の楽しみがない」と。母親同士で子どもの預け合いで外出し、自分の生き方も大事にしている。ここに来る女性の中には、粘土細工、ネイルケア、ハンドケア、ラテンダンスなど講習している人もいて、いつか教室を開くことを望んでいる人もいる。

現在の母親の悩みは、以前から多かったという。20年前に子育てグループを始めたころは、子育てが苦しい、つらい人が多かった。どう育てたらいいわからずちょっとしたことでも悩んでいた。幼児教室などお金がかかる場所しかなく、公園くらいしか行く場所がなく、保育所に入れているほうがまだ楽であった。利用が有料であれば来る人に限界がある。2～3歳になると「子育ていろいろ相談センター」などに行き、子どもが走り回れるが、子どもが小さいとこのような場、スペースがいいと考えられている。

父親が利用することはほとんどない。沐浴の講習などでは参加する父親が多くなってきている。「お父さんのための」など、子どもと一緒に講習などは父親の参加が多い。

2. 認可外保育施設

大阪市内には認可保育所の他、認可外保育所は125箇所ある。特に北区、中央区、西区では他の区より認可外保育所が多い。認可外保育所は子育て支援やサービスをどのような親のニーズに対応しようとしているのかをみよう。

ヒアリング項目は、次のとおり。

- (1) 保育サービスの内容／子ども数と受け入れ年齢、保育の対象年齢、開所時間、基本時間、開所日、病児保育、夜間保育、その他のサービス
- (2) 利用者の特徴／利用者の属性、年齢層、利用者の経年動向、男性の育児参加
- (3) 運営の現状

(1) 保育サービスの内容

子どもの人数と年齢は、現在は10数名で、乳児の時から来ている子どもなど、1歳児、2歳児が多い。保育対象年齢は、0歳から小学校入学までを対象としている。開所時間は7時から24時くらいまでであるが、基本時間は午前9時から午後6時までの9時間の預かりで、その後は延長料金になる。夜遅くまで預かる場合は、夕食を食べさせてから家まで送っている。開所日は、通常は月曜日から土曜日であるが、親の仕事の都合で要望があれば、年末も預かる。親が困っている事情もわかるため、できるだけ対応している。

病児保育は、認可保育所が子どもの熱が37度5分になれば子どもを帰すが、ここでは月ぎめの子どもは様子わかるので38度まではこちらで預かっている。熱が37度5分の段階で一応親に連絡をいれ、38度以上でも親が帰れない場合はこちらで病院に連れて行く。一時保育は、初めての人は預からないが、これまで利用したことがある人は当日でも預かる。利用目的で多いのは行事があるとき、親が病院に行くとき、子ども連れて行けない用事の時である。近くの預ける人がいないので、一時保育をしてもらえるか、という問い合わせが多くある。夜間保育は、ニーズがあるが、料金が高いので母親がパートタイマーの仕事であればお金が残らない。

その他のサービスで特徴的なのは送迎サービスである。利用者の個別ニーズに対応した朝夕の送迎をしている。親が少しでも時間を有効にと送迎の希望者は多い。送迎代がかかるが、親の負担が軽くなるように、母親自身に自分の時間や女性に戻る時間を持ってもらいたいと考えている。認可保育所へ迎えに行ってもその後こちらで保育することもある。一部だが私立小学校に入学した子どもの送迎や預かり、幼稚園児の預かりもある。本当はこのような親の個別ニーズに対応したサービスや保育もしたいが、費用が高くなってしまう。

(2) 利用者の特徴

利用者は、基本は共働きばかりで、働いている人がほとんどである。雇用者より自営業の人が多く、中には弁護士や医者もいる。忙しく仕事が終わる時間が遅い人が多い。年齢層は30歳代前後で、若い人が多い。

利用者の経年動向は、認可保育所に入れるようになると、多い時は3分の2くらいが移動する。また近隣に幼稚園があるため、勤務している人でも幼稚園に移る人がいる。自営業の親が多いので、幼稚園が預かる時間でも可能のようである。雇用者は、育児休業が終わると、認可保育所へは途中からの申し込みになるため、待機期間だけ利用して、2歳や3歳になると認可保育所へ移動する人が多い。

男性の育児参加は、子どもを迎えにいくと両親そろっての見送り、父親が保育園に連れて来

ることや、病院に連れて行ってから来ることもある。父親がよく協力している。

(3) 運営の現状

行政から補助がないため、経営はぎりぎりの状態である。補助金が出れば、保育士を増員し、子どもにもっと愛情を注げる態勢にしたい。子どもにとっては親より保育士と接する時間の方が長いからである。また少しでも待機児童を減らすことができると考えている。

Ⅲ ベビーカーによる親子が（ハード面から）見るまちの現地調査／天王寺区

「ベビーカーでまち探検～子育て世代のパパ・ママにやさしいまちを考える～」というテーマで乳幼児がいる親子（父、母）の参加者を募集し、ベビーカーを押しながら移動する間、道路や公園、地下鉄などの施設や子育て支援サービスが見られるか、まちの現地調査をして、子育て期の親子に安全・安心のまちづくりに何が求められているかを検証した。

1. 調査地・ルートの選定

ベビーカーに乗せるような乳幼児連れのため、現地調査には制約ができる。そこで、次の条件により、調査地とルートを選定した。

- ①子育てをテーマにした調査のため、子ども層と若年世帯が増加している地区であること。
- ②子ども連れであるため、長時間の調査時間が取れないため、調査項目がある程度密集していること。
- ③まち歩きの事前事後で、参加者数十名が集まれる場所があること。
- ④おむつ交換ができるトイレ休憩が取れる場所があること。

上記の4条件と、次に述べる調査のチェック項目が地理的に集中している条件から、天王寺区で、クレオ大阪中央（大阪市男女共同参画センター、大阪市天王寺上汐町、地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘駅）から近鉄上本町駅周辺とした。

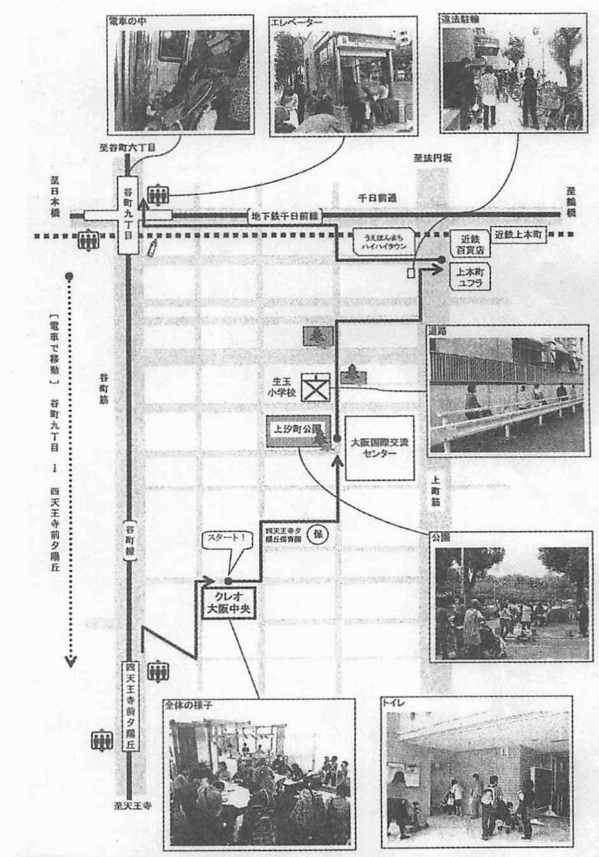


図4 現地調査のルート

現地調査の実施日は2010年（平成22年）11月21日（日）、時間は13時30分～15時30分の2時間。

現地調査の後、クレオ大阪中央でチェックシートの完成と参加者から報告と意見交換のまとめを行った。

現地調査のルートは、次のとおり。

クレオ大阪中央（公共施設）⇒ 四天王寺保育園（子育て支援施設）⇒ 上汐町公園（運動場のある大きな公園）⇒ 大阪国際交流センター（公共施設）⇒ 公園（小さな公園）⇒ 上町筋（大通り）⇒ 上本町ユフラ（商業施設）⇒ 24時間保育園（子育て支援施設）⇒ 谷町九丁目駅（公共交通施設）⇒ 四天王寺夕陽丘駅（公共交通施設）⇒ 谷町筋（大通り）⇒ クレオ大阪中央

2. チェック項目とチェックシート

子育て中の当事者である父親や母親にとって、日常感じていることや自分の居住するまちと調査地の違いを気づくことで、住みたいまちへのニーズや課題が出やすくなるように、子どもを連れた暮らしに身近な場所をチェック項目に設定した。



写真3 ベビーカーでまちの安全・安心をチェック

現地調査でのチェック項目は、公園、歩道、道路、駅の中、電車の中、商業施設、公共施設、トイレ、その他の9項目である。本調査では、まち歩きという性格から、施設（ハード面）の項目が中心になった。チェックシートは記述式で、できるだけ具体的な記入をしてもらうことで、子育て期のまちへのニーズや課題を明確にし、また同時にそれが当事者の気づきにつながるようにした。

チェックシートの具体的な記入は、場所の項目ごとに「良い」点と「悪い」点を記入し、写真を取る。そしてその「場所ごとの理想像」（こうであればいい）を9項目記入。「全体として理想像（方向性、構想、仕組み）」つまり、こんなまちであってほしいと考えることを記入してもらう。

ルート上の事前調査により、各項目での着眼点をチェックポイントに予定した。

- ・道路／車道、歩道、交差点、舗装、段差、路上駐車、路上駐輪、交通量など
- ・公園／トイレの有無、ベンチ、安全性、視界の確保、遊び場としての機能、スロープ、管理面、日陰など
- ・駅舎／エレベーター、改札の広さ、トイレなど
- ・商業施設や公共施設／トイレ、授乳室、保育室、サービスなど

3. ベビーカー親子による現地調査の結果

チェック項目の個別箇所毎に、「良いところ」「悪いところ」「場所ごとの理想像」の記入をし、「あなたにとっての“子育てにやさしいまち”の理想像」（方向性、構想、仕組み）をまとめた。例えば、事例をあげると次のようである。

(1) 事例〈公園〉

*良いところ

- ・植木が多い
- ・ブランコが乗せやすく、安全
- ・見通しが良い
- ・利用する人が多い公園は安心できる
- ・砂場に柵がある 等々

*悪いところ

- ・トイレや手を洗う水道が無い
- ・スロープが少なく、スロープの場所がわかりにくい
- ・日陰が少ない
- ・ボール遊びをする場所に柵が無く危険
- ・大きい子と小さい子が一緒の場所で遊んで危険 等々

*場所ごと（公園）の理想像

- ・広くて、緑が多くて、清潔なトイレがあり、遊具も多く、静かで治安が良い

- ・入り口が入りやすい、乳児が安心して遊べる公園
- ・スロープが多いこと、安全、カラフル
- ・子どもが安心して遊べるように、警備があるとうれしい
- ・安全にたくさんの子どもが遊べる。フェンスを設置するなどボールが外に出ない工夫
- ・見通しが良く、清潔だと安心して遊ばせることができる 等々

(2) 「あなたにとって“子育てにやさしいまち”の理想像」で記述された事例は次のようである。

- ・「町全体が狭いし、人口も多いので、道路が狭いのも、公園が小さいのも仕方ないと思う。でもなるべく段差を無くすとか、路上駐車を少なくするとかで、できることはあると思うので、そういったことに力を入れて行ってほしい。町のいろいろな場所にもっと防犯カメラを設置したら、犯罪を未然に防止できるかと思う。デパートやスーパー、公共施設など、不特定多数が出入りする所では、もし、子どもが迷子になったら、ただの迷子か誘拐なのかかわからないので、店員に言ったら、すぐに店側は出入り口を封鎖して、見つかるまで出入り禁止にしてほしい。他の客には迷惑だが。もし、誘拐され外に連れ出されたら、二度と会えないかもしれないので。そういったことが常識にしてほしい。」
- ・「子育てとともに、高齢社会になってくると思いますので、徐々にできるところから、スロープを増やしたり、駅にエレベーターを増やしたり、車椅子やベビーカーが通りやすいように路駐を減らす等の動きをしていってもらえるといいと思う。また、違った観点で近所づきあいが少なくなってきたので、本日のような場や交流ができる場を設けていただいて、接点を増やしていける社会作りをお願いしたいと思います。」
- ・「ベビーカーの取り入れ（多目的トイレ、シルバーシート、電車の車椅子スペース）が堂々と使えるようになる。同時にベビーカーでのまち歩きのルールを作って、子どもマナーを考える（電車では畳む、ラッシュは避けるなど）。地域全体で子育てができれば、親も助かるし、勉強になるし、祖父母がいない家庭も多いので、子どもにもいいかなと思った。」（要求するばかりではなく、自分たち自らも考え、地域での子育てのまちづくりを考えている）

(3) ベビーカー親子が見た現地調査のまとめ

全体的には

- ・実際にベビーカーや車椅子を使った設計や設置をして欲しい。自分が使ってみて初めて気づいたことが多かった
- ・町のいろいろな場所に防犯カメラを増やせば、未然に犯罪を防止できると思う
- ・地域全体で子育てができれば、親も助かり、アドバイスがもらえ、子どもにもよい
- ・近所付き合いが少なくなっているなので、今回のような交流ができる場や、コミュニケーションを増やしていける社会づくりをお願いしたい

公園や道路では

- ・公園はボール遊びなどする運動場と遊具や砂場を分ければ小さい子ども連れで安心して利用できる
- ・ベビーカーを押して歩くと道路と歩道の段差が気になった
- ・路上駐車（駐輪）、くわえタバコ、歩道を走行する自転車などを危険に感じた
- ・街灯があり、明るく、夜でも安全なまちだと安心して住める
- ・交通量が多いが歩道が無い道路や公園付近には、ガードレールがあれば安心

施設や駅舎では

- ・公共施設や大きな商業施設には、気兼ねなく授乳できるスペースがあれば気軽に外出できる
- ・駅の改札の幅を広くするとベビーカーでも通りやすい
- ・電車やエレベーター等に「車椅子マーク」のように、子ども連れ優先の「ベビーカーマーク」があれば利用しやすくなる
- ・ベビーカーごと入れる広いトイレが便利。女性用トイレにはあるのに、男性用にはベビシートやベビキープが無いところがあった

以上、ベビーカーで町の現地調査をした結果、多くの当事者としての気づきがあげられ、全体的に安全、安心のまちを望んでいることがわかった。今調査は施設・設備などハード面でのチェックポイントも多く、それに対しては整備がされていると考えていることがわかる。しかし、細かい改善点もあげられ、子育て期にある親からみた安全・安心のまちづくりの条件も見えてきた。

Ⅳ 子育て中の父・母のニーズや課題の聞き取り調査

西区堀江地区のまちの現地調査を踏まえ、子育てにやさしいまちづくりにどのような条件が必要か、また課題を探るため、大阪市子ども文化センターに来訪した親子連れの親を対象に聞き取り調査を実施した。以下の14項目の質問に、回答項目をあげ、調査者が解答欄に記した。調査日は、2010年12月18日。

1. 調査項目

(1)性別 (2)同居家族の構成 (3)配偶者の年齢 (4)子育てを楽しんでいるか (5)自分自身と配偶者の子育てへのかかわり (6)子どもを通じた付き合い (7)住まいの近くの子育てサービスや施設 (8)住まいの近くで利用するサービスや施設 (9)今の住まいを決めた理由 (10)住まいの区名 (11)居住年数 (12)住居の種類 (13)自分自身と配偶者の職業 (14)世帯年収

2. 調査結果

- (1) 聞き取り有効回答総数は、女性39人、男性6人の、計45人。
- (2) 同居家族は、母7.7%、父5.1%、配偶者の母0、配偶者の父2.6%で、ほとんどが核家族である。子どもの数は、1人が56.4%、2人が41.0%、3人が2.6%。末子年齢は3歳～8歳。

- (3) 年齢は、女性（妻）32歳～46歳、男性（夫）は31歳～50歳。
- (4) 子育ては「楽しい時が多い」という女性は74.4%、「楽しい時としんどい時が同じ」18.0%、「いつも楽しい」7.7%である。「しんどいと感じる時の方が多い」「いつもしんどい（つらい）」は0である。
- (5) 子育てへの関わりは、女性は「十分である」46.2%、「ある程度十分」33.3%、「あまり十分でない」5.1%、「不十分である」が0である。女性が配偶者に対しては、「ある程度十分である」46.2%、「十分である」18.0%、「あまり十分でない」7.7%、「不十分である」は12.8%ある。
- (6) 子育てを通じた付き合いは、「子どもを預けられる人がいる」53.9%、「子どもを注意してくれる人がいる」12.8%、「子連れで行き来する人がいる」28.2%、「挨拶程度する人がいる」5.1%、「子どもを通じて関わる人はいない」「特に関わりたくない」は0である。
- (7) 子育てサービスや施設で、便利でよく利用するもの（複数回答）で最も多いのは「地域で子どもと一緒に参加できるイベント」で33.3%、次いで「子ども連れOKの飲食店」が28.2%、「児童いきいき放課後事業」23.1%。その他「語学・音楽・育児等の幼児教育施設」18.0%、「子育ての悩みを相談できる場所」15.4%、「延長保育」10.3%、「集いの広場などの公的な保育支援事業」10.3%である。あと「長時間保育」「駅近の保育園」「学童保育」が各5.5%ある。
- 「休日保育」「24時間保育」「仕事から帰宅するまでの間小学生を預かってくれる託児施設」「保育所の送り迎え」「家事や育児の代行」「子どもに夕食を食べさせてくれるサービス」「仕事から帰宅するまでの間、マンション内や地域内で子どもを預かるサービス（夕食、宿題も）」は0であった。
- 一方、子育てサービスや施設で無くて困っている、今後ほしいものは、最も多いのが「駅近の保育所」で28.2%である。次いで「語学・音楽・育児等の用事教育施設」15.4%、「仕事から帰宅するまでの間、マンション内や地域で子どもを預かるサービス（夕食、宿題も）12.8%、「児童いきいき放課後事業」「家事や育児の代行」は各10.3%。「学童保育」「仕事から帰宅までの間小学生を預かってくれる託児施設」「子ども連れOKの飲食店」が各7.7%ある。
- (8) 利用するサービスや施設で、便利で快適に利用しているもの（複数回答）は、「図書館」が46.2%、「趣味や習い事ができる施設」25.6%、「くつろげるカフェ」23.1%、「洋服や靴などのショップ」18.0%、「ヘア・エステ、ネイル等の美容関連サロン」15.4%、「夜遅くまで食事ができる飲食店」12.8%、その他少ないが「マッサージ・整体・リラクゼーションの健康関連サロン」「語学・資格等を学べる使節」が各5.1%ある。反対に無くて不便である、今後ほしいもの（複数回答）は、「趣味や習い事ができる施設」23.1%、「くつろげるカフェ」20.5%、「洋服や靴などのショップ」「図書館」が各10.3%、「語学・資格等を学べる施設」が7.7%である。
- (9) 現在の住まいを決めた理由で最も多いのが、「夫の職場に近いから」で38.5%、次いで

「駅に近く通勤に便利だから」25.6%、「妻の実家が近いから」20.5%。家族以外の条件では「梅田や難波等の中心部に近いから」18.0%、「公園などの遊び場が近いから」15.4%、「食料品や日用品の店が近くにある」15.4%。「保育所・学校などに近いから」「夫の実家に近いから」が各10.3%、「妻の職場に近いから」「将来の資産性」7.7%、また「救急や夜間対応の病院が近くにあるから」5.1%、「学童保育施設の利用のしやすさ」2.6%。「保育所の利用のしやすさ」「夜間・休日・代行など民間の保育サービスが近くにあるから」は0である。

(10) 居住地は、女性は84.6%が大阪市内であるが、市外も15.4%。市内のうち地元の区は21.0%だけである。

(11) 居住年数は全員が10年未満で新しい住人である。

(12) 住まいの種類は、「マンション（購入）」が最も多く46.2%、次いで「戸建て住宅（購入）」23.1%、「マンション（賃貸）」20.5%、「社宅」5.1%で、「二世帯住宅」は0である。

(13) 妻の職業は、「無職（家事専業）」56.4%で半数強。働いている人は、「民間企業の正社員」15.4%、「短時間のパート・アルバイト・非常勤職員」10.3%、「自営業・自由業」7.7%、その他「契約社員」「家族従業者」「その他」が各2.6%である。

夫の職業は「民間企業の正社員」が多く64.1%、その他「公務員等の正職員」「契約社員」「自営業・自由業」が各7.7%である。

(14) 世帯年収は、「500～700万円未満」「700万から1000万円未満」が最も多く各30.8%で、次いで「300～500万円未満」20.5%、「1000万円以上」も10.3%ある。「100万円未満」も2.6%あった。

3. 調査結果から見えるまちの子育て支援ニーズ

有効回答者総数が45人であり、また女性がほとんどであるため、男性の回答数を除いた。総数が少ないが、ヒアリングからおよそのニーズや傾向を捉えることができる。

回答者の属性は、子どもは幼児・低学年で、女性は30～45歳、マンション居住者で、居住年数は10年未満の新しい住民であり、夫は民間会社員で、世帯年収が500万～700万円・700万～1000万円の家族である。女性は専業主婦が半数強で共働きは半数弱である。また西区の堀江地区にある子ども文化センターへの来訪者をヒアリング対象としたが、西区以外の来訪者も多く、堀江地区の居住者の特徴とはいえないが、前述の属性から都市居住の若年子育て層の特徴を備えている。

居住地選定の理由は、駅に近くて通勤に便利や子育てのサポートが期待できる妻の実家の近く、また子どもには公園・遊び場がある、さらに都市中心部に近いなど買い物や人気など都市の活気や賑わいへのニーズが見られる。

居住地の近くの子育てサービスや施設では、子どもと一緒に参加できるイベントや子連れで行ける飲食店、幼児教育施設、子育ての悩み相談が利用されている。利用している施設には放課後事業や延長保育があり、無くて困っている施設として駅近くの保育所が最も多い。この他帰宅するまでの間マンションや地域で子どもを預かるサービスなど共働きの女性のニーズとみ

られる。

居住地近くで利用するサービスや施設は、図書館、趣味・習い事の施設、くつろげるカフェ、洋服などのショップが多く、また現在は無いが欲しい施設として上げられている。

家族や地域の間関係では、女性は配偶者の子育てのかかわりはある程度十分だと考えており、地域では子どもを預けたり、子連れで行き来できる関係など子育てを通じた付き合いが見られる。

以上から、子育て期の親子、特に女性の安全で安心して快適に住むことができるまちの要素をまとめた。

- ・立地／夫の職場の近接、妻の実家の近接、ターミナルや中心部への便利さ、公園や遊び場、日用品の販売店の近接、医院・病院
- ・交通アクセス／鉄道駅の近接性と数
- ・マンション（住居）の価格／世帯年収
- ・保育施設と保育サービス／認可保育所、認可外保育所、駅近くの保育所、延長保育
- ・子育てサービスや施設／親子で参加のイベント、放課後事業（学童保育）、子どもの悩み相談所、地域の子育て支援グループと集いの場、幼児教育施設、仕事から帰宅するまで子どもを預かるサービス、子連れで行ける飲食店、家事や育児の代行
- ・近くで利用できるサービス・施設／図書館、趣味・習い事の施設、くつろげるカフェ、洋服等のショップ、ヘア・エステ等美容関連サロン、健康関連サロン、語学・資格を学べる施設

まとめ

少子高齢人口減少、共働き世帯の増加、地価の低下や産業構造の変化による子育て層の都心回帰などの背景の中、大都市において子育て期にある親と子どもが安心して住むことができ、かつ男女がともに仕事と家庭を両立でき、子どもを育てられ楽しいと感じられるまちのあり方を日常生活の視点から把握し、分析してきた。

大阪市の中で子どもと子育て層が増加している西区、北区、中央区、天王寺区の中でまちの現地調査、地域の子育て支援のグループや認可外保育所、ベビーカーによる親子のまち現地調査、また子育て中の父・母のニーズや課題の聞き取り調査から、予測される子育て世帯が現実に住むことを選択しているまちの要素、条件を抽出し、また地域の子育てグループや認可外保育所から専業主婦や多様な働き方の父・母が必要としている潜在的ニーズが明らかになった。またベビーカーによるまちの現地調査から特に施設や設備のハード面からの安全・安心まちづくりの条件も見えてきた。また子育て中の父・母への聞き取り調査から住まい近くの子育てサービスや施設だけでなく、親自身が利用する施設やサービスや住居の選定の理由などから、より具体的な大都市における子育て期の親子のニーズと課題を抽出することができた。

北区や中央区でも同様の調査をしたが、本稿では紙面の関係で特徴的な西区と天王寺区での

調査結果から考察した。今後、これら多くの現地調査やヒアリング調査の結果を整理し、大都市における子育て期の親子の安全・安心なまちづくりの指標を作成する。

謝辞

本研究は、(財)大阪市女性協会で行った調査研究の一部であり、調査にあたって多くの方々に大変お世話になった。同協会の水本梨恵氏、研究チームの吉峰英一氏はじめ、地域の子育てグループのNPO法人、ベビーカーで親子で現地調査していただいた多くの市民、大阪市子ども文化センター、つどいの広場のボランティア、認可外保育所、また京都女子大学の横村ゼミ生、その他多くの方々に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 大阪市「大阪市人口統計 年齢別推計人口」平成18年度・平成22年度
大阪市『大阪市時系列統計表・第8編「国勢調査—高齢者数、夫婦世帯数、子どもの数—」
大阪市『大阪市時系列統計表・第6編「住宅・土地統計調査」]
大阪市『大阪市子ども青少年局報道発表資料・保育所の入所枠の拡大と待機児童数の推移』2010年5月
大阪市・(財)大阪市女性協会『男女共同参画のまちづくり調査研究報告書』2009年3月
横村久子「男女共同参画のまちづくり」『現代社会研究』Vol. 12、京都女子大学現代社会学部、2009年
安全・安心まちづくり研究会『安全・安心まちづくりハンドブック～防犯まちづくり編』ぎょうせい
安全・安心まちづくり研究会『安全・安心まちづくりハンドブック～防犯まちづくり実践手法編』ぎょうせい
い
大阪市ホームページ（認可保育所一覧）<http://www.city.osaka.lg/kodomo/page/0000026507.html>
<http://www.city.osaka.lg/kodomo/page/0000002462.html>
<http://www.city.osaka.lg/kodomo/page/0000002473.html>
大阪市立子育ていろいろ相談センターホームページhttp://www.osaka-kosodate.net/k_gaiyou.html